

音順	方劑名	生薬構成 および製法・服用方法
ちー2	傷寒論・金匱要略条文 竹葉石膏湯	読み および解説・その他 竹葉 (苦平) 2g・ 石膏 (辛微寒) 16g・ 半夏 (辛平) 5g・ 人參 (甘微寒) 3g・ 甘草 (甘平) 2g 粳米 (甘平) 7g・ 麦門冬 (甘平) 10g 上の7味を水400mlを以って煮て240mlとなし、滓を去り粳米を入れて再び煎じて米が熟したならば米を去り、40mlを1日3回温服する。
弁陰陽易瘥後勞復病脈証併治第十四第6条 (傷寒論)		
「傷寒解後、 ^げ 虚 ^{きよるい} 羸少氣し、氣逆吐せんと欲する者は 竹葉石膏湯 之を ^{つかきど} 主 ^る 。」		
<p>解説 傷寒が軽快した後で、身体が瘦せて力なく、呼吸が弱く、精気が衰えてしまい、気が下から逆して胸に突き上げて、吐き気があるものは、竹葉石膏湯が主治する。</p>		
<p>熱病の回復期で、大病であったので気虚で、津液不足を伴った気陰両虚になって、瘦衰え、息づかいも弱く、ぐったり憔悴しているが、未だ余熱が中焦に残っており、胃陰虚による虚熱が影響して、胃失和降（胃気が正常に降りない）するために胃気上逆して吐き気が生じ、悪心、食欲不振も生じる。また舌質は紅で、乾燥し、舌苔は少なく、脈は虚数で、胃虚熱と共に、心火も少しあり、心煩、不眠、盗汗、口渴、痰が切れにくく咳をする。この様な気陰両虚で、中焦（心、肺、胃）の虚熱による虚煩がある場合には、竹葉石膏湯が主治する。</p>		
「方劑決定のコツ」の注釈		
<p>傷寒の治療の途中で、胃気がすっかり虚してしまって、胃が虚熱を帯びて、中の気を散ずる事が出来ずに「氣逆吐せんと欲する」の症状を現わすので、胃気虚弱になれば、肺の気も散ぜず、肺が虚熱を持って咳が止まらなくなってしまうことになる。</p>		
<p>竹葉石膏湯で肺熱の症状が取れたら、すぐ補う薬方、即ち麦門冬湯とか、または証によって選んだ薬方で、裏を補ってやればよく、竹葉石膏湯はいつまでも用いるべきではない。</p>		
<p>竹葉石膏湯証</p>		
<p>体表面の熱が取れた後、身体が疲れて、息づかいも弱くなり、時にむせたり、吐きそうになったりして胸苦しい、咳もあつたり、口渴などの症状がある。</p>		
<p>熱性疾患が長引き、解熱せず、口唇乾燥、口渴、皮膚乾燥、痰が切れにくい、激しい咳が続き声がかすれ、煩躁状で、尿量が少ない状態の呼吸器系感染症、肺炎、慢性気管支炎の再燃などで、発熱が続くものに用いる。</p>		
<p>人參・甘草が益気生津し、麦門冬・粳米が胃気、胃液を滋養し、半夏が和胃降逆止嘔する。</p>		
<p>参考 肝熱による虚煩で、胸苦しい、胸痛、胸が塞がった感じ、小便赤黄などの症状があり、それを気に病んで落ち着きが無く、眠れないなどの症状がある場合は、梔子豉湯を用いる。</p>		
<p>竹葉石膏湯は、麦門冬湯合白虎加人參湯に相当し、気陰両虚で、心肺胃虚熱による虚煩証に用いる。</p>		
<p>竹葉石膏湯証</p>		
<p>新古方薬囊によれば「風邪、其の他の熱のある病が、汗が出て一旦熱が取れた後、身体が疲れ、息づかいも弱く、時々咽がむせつぽく吐きそうになる者。汗を發し汗が出たけれども、内の熱が取れず病人甚だ熱がり、胸中悶え、咳の劇しき者等にも宜し。本方は使い道甚だ多し。」と記されている。</p>		